当院における介護老人保健施設の調剤オンライン化への取り組み

相馬　貴史，相楽　賢一，羽田　好範，佐々木　淳，渡辺　博文

北海道社会保険病院　薬剤部

Key Words :
調剤オンライン化、業務効率化

要　旨

当院では介護老人保健施設サンビュー中の島（以下、老健施設）を併設している。その調剤を効率的で安全に行うため、手入力の既存の方法からオンライン化へシステムの変更を試みた。今回私たちは、LAN回線を使用し老健施設の調剤オンライン化のシステムを独自に構築し、併せて、一包化中の薬剤の識別を薬剤師以外の職種でも容易に行えるよう薬袋・分包紙のレイアウトの変更を行ったので報告する。

はじめに

今日、病院薬剤師の業務は調剤、注射薬調剤、DI、薬剤管理指導業務、注射薬混注そして、持参薬確認業務など多岐にわたっている。限られた人数で様々な業務を行う中で、効率化することは必須であり、調剤はとりわけ効率化しやすい業務である。当院における老健施設の調剤は、老健施設のオーダリングシステムより出力された処方箋をもとに薬剤師が薬剤部内の調剤支援システムに処方内容を再入力し、調剤を行っていた。この方法では、薬剤師が処方内容を登録するという調剤以外の作業があるため非効率的であり、登録時に入力ミスなど人為的な間違いを起こす可能性があった。この点を改善するため、今回私たちは老健施設の調剤オンライン化の取り組みを行い、併せて薬袋・分包紙のレイアウトの変更も試みた。

方　法

老健施設のオーダリングシステムで処方されたデータをCSVデータに変換後、当院の院内LAN回線を使用し、そのデータを薬剤部内のサーバーに送信、サーバーでそのデータを再変換処理した。そのオーダデータを調剤支援システムに取り込み、処理した。薬袋・分包紙のレイアウトは、院内で使用していたものをベースとし、患者・看護師等にも見やすいよう工夫をし、変更を行った。

結　果

オンライン化により以前まで行っていた処方入力業務を省くことができ、時間を大幅に短縮し、効率化を図ることができた（図１）。また、手入力のミスをなくすことでより安全な調剤を行うことができるようになった。

薬袋のレイアウトの変更では、患者名・投与回数および投与日数のフォントを拡大し、誰が１日何回、何日分、１回にどれだけ服用するかを強調して表記した。また、一包化の場合に、錠剤の識別コードと１包中のその薬品の錠数を印字することで、薬剤師以外の他職種でも一包化中の薬品の確認を行えるようにした（図２）。

分包紙は、現在の患者名、服用時間に加え、病棟、薬品名と薬品の総種類および総錠数の印字を行えるようにした（図３）。

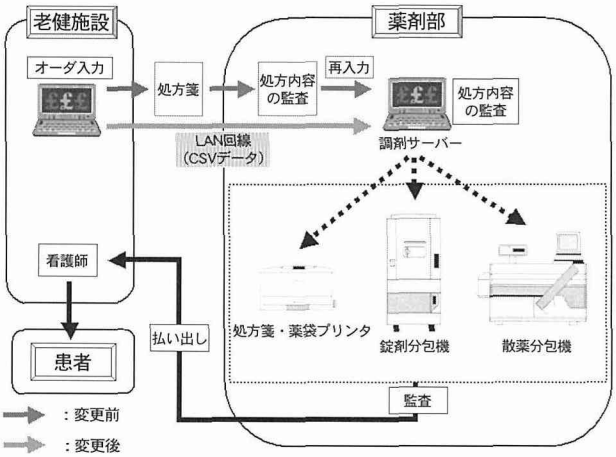

図１　システム変更前後における調剤の流れ

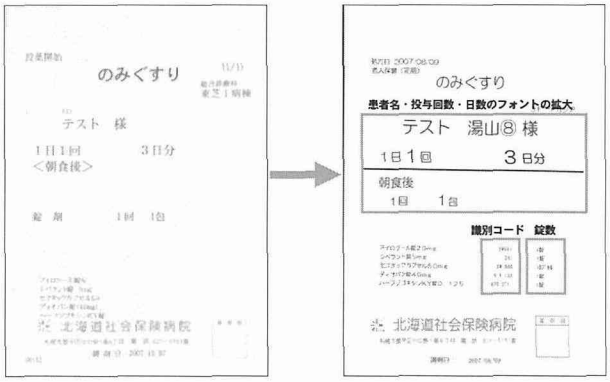

図２　変更前後の薬袋のレイアウト

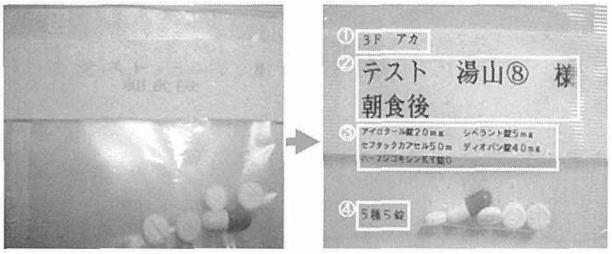

図３　変更前後の分包紙

考　　察

老健施設とのLAN回線を利用したオンライン化により従来の処方入力業務を省くことができ、時間を大幅に短縮、効率化を図ることができた。また、処方入力を発生源入力とすることでリスクの軽減にも繋がったと考えられる。

薬袋のレイアウト変更による各薬剤の識別コード・一包中の錠数の印字により、薬剤師以外の職種でも一包化中の薬剤の確認が容易になったと考えられる。また、患者名、投与回数および日数のフォントの拡大によって、誤投薬の予防にも貢献できたと考えられる。併せて、分包紙のレイアウトを変更したことにより、薬剤の識別が容易になり、リスクマネジメントの観点からも改善、貢献できたと考えられる。